プレスリリース　PRESS RELEASE

宮本三郎、画家としてⅡ
混沌を貫け、花開く絵筆

1950s-1970s

《假眠》 1974年

世田谷美術館分館
宮本三郎記念美術館　Miyamoto Saburo Memorial Museum

展覧会名	宮本三郎、画家としてⅡ：混沌を貫け、花開く絵筆　1950s-1970s Miyamoto Saburo Chronicle Ⅱ：1950s-1970s
会　　期	2021年10月16日（土）～2022年3月13日（日）
会　　場	世田谷美術館分館 宮本三郎記念美術館　Miyamoto Saburo Memorial Museum 〒158-0083 東京都世田谷区奥沢5-38-13　TEL:03-5483-3836　www.miyamotosaburo-annex.jp
主　　催	公益財団法人せたがや文化財団　世田谷美術館
開館時間	10時～18時（最終入館は17時30分まで）
休 館 日	毎週月曜日（ただし、1/10[月・祝]は開館、1/11[火]は休館）、年末年始（12/29～1/3）
観 覧 料	一般200円(160円)、大高生150円(120円)、65歳以上/中小生100円(80円)、 障害者100円(80円)、ただし小・中・高・大学生の障害者は無料。介助者(当該障害者1名につき1名)は無料。　※(　)内は20名以上の団体料金　※小・中学生は土、日、祝・休日は無料

◆ 宮本三郎、画家として Ⅱ: 混沌を貫け、花開く絵筆　1950s-1970s

2021年度の宮本三郎記念美術館では、洋画家・宮本三郎（1905-1974）の画業を、「宮本三郎、画家として」と題し、年間を通して2期に分けてご紹介しています。その第1部（4月1日 -9月26日）では、画家として出発した1920年代にはじまり、ここ奥沢のアトリエで描いた裸婦や女性像、また初の渡欧期を経て、戦中の従軍画家としての仕事、さらに終戦直後に描いた作品までをご紹介しました。そして第2部となる本展では、戦後の1950年代から、最晩年までの宮本三郎の仕事をご覧いただきます。

1948年に、疎開していた故郷の石川県小松から、東京に居を戻した宮本は、1952年には満を持して2度目の渡欧を果たします。1度目は1938年から39年にかけ、パリを拠点に古典美術を巡りつつ、第二次世界大戦の勃発により帰国した宮本夫妻は、このときはフランス、イタリアのほかスペインやギリシャにも足を伸ばしました。また、各地で20世紀の美術にも触れる機会を得ています。

帰国後の1950年代後半は、世界的に流行した抽象表現を、具象を得意とした宮本なりに受けとめた試みを展開します。同時代の動向を多分に意識しつつ、自らの信念や表現を貫くための葛藤の痕跡が、それらの作品からは見てとることができます。

やがて1960年代に入ると、戦後の経済復興を遂げた東京の都市のすがた、またそこで表現者としてたくましく活躍する人たちの姿を集中的に描きます。そして60年代の末から70年代にかけては、宮本にとって継続的なテーマであった花と裸婦を、これまでになくのびやかなタッチと鮮やかな色彩で描き出し、さらには西欧の神話的主題を迎えることによって新たな様式へと発展させました。

日本の洋画家として生きる決意を胸に、表現者として周囲の風や自らと闘いながら、円熟の晩年期へ転換してゆく、その道筋を辿ります。

◆宮本三郎（みやもと・さぶろう）について

1905年5月23日に現在の石川県小松市松崎町に生まれ、1935年7月より世田谷区奥沢にアトリエを構えた、昭和を代表する世田谷区ゆかりの洋画家です。
川端画学校で富永勝重、藤島武二、また個人的には安井曾太郎に指導を受け、戦前は二科展を中心に発表を行いながら、雑誌の挿絵や表紙絵の制作でも活躍。戦時中は従軍画家として藤田嗣治、小磯良平らとともにマレー半島、タイ、シンガポールなどに渡り《山下、パーシバル両司令官会見図》（1942年）をはじめ、数々の作戦記録画を制作しました。戦後は、熊谷守一、田村孝之介らと第二紀会を設立。生来の素描力を土台に、さまざまに画風を変えながらも、人物を主たるテーマとして制作、晩年は花と裸婦を主題にした豪華絢爛な絵画世界を構築します。1974年10月13日、腸閉塞による心臓衰弱のため、69歳で他界。

撮影 藤原正　撮影年不詳

MIYAMOTO SABURO

◆ 宮本三郎 作品画像

◆各画像は広報用として提供しております。ご希望の際は広報担当までお問合せください。※( )は題不詳につき仮題

《ヴィーナスの粧い》 1971年

「神話」を主題に取り入れることで、人物画、とりわけ裸婦像を神秘的で華やかな様式に発展させた。

《黄色バックの花》1961年頃

黄色の色面が背景にして華やかな作品。画面の外へと飛び出していくような自由なタッチは、50 年代の作品と一線を画す。

《芥子と立藤》 1967年

この頃、鮮やかな色彩と大胆なタッチで生命力と躍動感に満ちた花々の作品を描く。

《(梅林 熱海)》 1970年頃

伸びやかな筆の動きが印象的な風景画。

《假眠》 1974年

燃え立つような赤い画面のなかに横たわる裸婦像。出品した展覧会開幕翌日に宮本は息をひきとった。

《(うずくまる裸婦)》 1957年頃

抽象表現が国際的に流行するなかで、独自の絵画的回答を模索していた頃の作品。大胆な構図で切り取られた裸婦を点描のなかに表現している。

《乳牛》 1958年

ドリッピングのような手法を採用して描かれた乳牛。1950年代半ばに日本の美術界を席巻したアンフォルメル運動を強く意識した作品。

◆ 宮本三郎記念美術館

◆宮本三郎記念美術館について

洋画家・宮本三郎（1905－1974）が長きにわたり制作の拠点とした地に、世田谷区が建設した美術館で、2004年4月に世田谷美術館の分館として開館しました。展示室において年2回開催する収蔵品展を通じ、宮本三郎の画業を様々な視点からご紹介しています。

◆講演会やワークショップ、コンサートなどの開催について

イベントの開催につきましては、当館ホームページでお知らせいたします。

［参考］過去の活動

人ひろばvol.44
「奥沢・玉川の地域の歴史再発見！第2弾」
（2019年9月8日開催）

サマー・ワークショップ2021
「美術館をお花でいっぱいに！」
（2021年8月12日～15日開催）

ニューイヤー・コンサート
アコルディ弦楽四重奏団
（2019年1月27日開催）

◆ご来館の際のお願い

※当館では、新型コロナウイルスの感染症対策の実施にともない、お客様にご協力をいただいております。
ご来館の際には、当館ホームページの情報をご確認くださいますようお願い申し上げます。

◆【おしらせ】

「第6回宮本三郎記念デッサン大賞展 明日の表現を拓く」（東京巡回展）は世田谷美術館（区民ギャラリー）で開催する予定です。
開催期間：11月23日（火・祝）～12月5日（日）
会場：世田谷美術館（東京都世田谷区砧公園1-2）区民ギャラリーA・B

◆交通案内

東急東横線・大井町線「自由が丘」駅 下車／徒歩7分
東急大井町線「九品仏」駅 下車／徒歩8分
東急目黒線「奥沢」駅 下車／徒歩8分
東急バス（渋11） 渋谷駅～田園調布駅「奥沢六丁目」下車／徒歩1分
東急バス（園01） 千歳船橋～田園調布駅「浄水場前」下車／徒歩10分
※当館の来館者用駐車場は、車椅子の方用スペース1台分のみとなります。

◆お問い合わせ先

宮本三郎記念美術館（広報担当）
Email：miyamoto.annex@samuseum.gr.jp
TEL：03-5483-3836　FAX：03-3722-5181
〒158-0083　東京都世田谷区奥沢5-38-13

※当館には展覧会担当の学芸員は常駐しておりません。
ご質問等は上記広報担当までお願いいたします。

世田谷美術館分館
宮本三郎記念美術館